

「ジャン・クリストフ第3巻」女友だち

片山敏彦 訳

報告 中田裕子

朗読 松田有美子・中田裕子

リュシール・アルノー夫人、彼女は夫の帰宅を待っていた。

アルノー氏は昼間の時間はずっと家を外にしていた。午前と夕方とに授業時間があった。

アルノー夫人は他に誰もいない住居に独りぼっちだった。八時から十時まで洗濯仕事などをして来る家政婦と午前に注文取りと配達とに来るご用聞き以外には、誰一人訪れて来る人もなかった。同じアパートの他の同居人の誰とも付き合いがなかった。クリストフとその女友だちのセシールだけがアルノー夫人と友誼を保っていた。しかし二人とも遠いところに住んでおり、仕事に疲れるために、何週間も訪ねてこないようなくあいだった。彼女はただ自分だけに頼って生きていくほかはなかった。彼女の心が倦み疲れることは少しもなかった。それは毎日する微々たる務めの仕事があるだけでもこと足りた。一本の植物の葉群れ、家具たち、洗濯下着類にも念を入れて手入れをした。仕事をすっかり済まして独りきりの昼食をいつともなく終え、どうしてもしないわけにいかない用達しの出歩きをひとしきりして、四時ごろに帰って、それから手仕事をしながら窓際の暖炉のそばに猫といっしょに座っていることができた。居馴れている場所に座り、足を足載せの上に載せ、手に編み物の道具をもち、指だけが動いていてからだは不動で、心は夢み心地にふけていた。自分のそばに彼女の愛読の本のどれか一冊を置いていた。これらの小説の中の人物たちの生が、彼女自身の生と同じほど実在的であることを少しも疑わないのだった。孤独に暮らしているうちに、彼女は神秘的な直観力を持つようになっており、この直観力によって、その人々自身が多くの場合自覚しないような、その人々の過去と未来の生活のいろいろな秘密を見抜くのだった。しかし彼女は、他人の心の中を読み取ろうとしたり、あるいは他人のほうへ目を向けたりする必要さえありはしなかった。自分自身の内面へ目を向けさえすれば充分だった。外から観ては、生彩のない彼女の存在は心の内側ではなんと輝いていたこと！何と充実している生活だったことか！

アルノー夫人の子供時代のずっと初めの頃のことまでさかのぼって回想した。……しかし自分にとってしか意味ないことを他人に物語ったところで何になろう！

朗読1 中田

朗読2 松田

このけなげな小柄の婦人は、日常生活の義務を果たさなければならない時間を忘れはしなかった。アルノーが家に帰ると彼は、灯がともされており、そして、彼を待っていた妻の蒼白い、微笑している顔が目の前にあるのを見出すだった。妻がその日に、心に紡ぐ夢によってした数々の遍歴については、夫は何も知らず、またそのことに思い至りもしなかった。

その際むつかしいことは、二種類の生活が衝突を起こさずに共の続けられていくことだった——日常の現実生活と、そして、広い見通しを持つ、大きな精神生活と。

この数年の最近は自分の教授生活の中に生ずる、小さな、いろいろな、癪にさわることもどもや、不当な目に逢わされることや不公平な対偶や同僚教授たちと自分の学生たちとの関係において彼がいまますます感じる出来事などに気を揉む度合いが次第に大きくなってきて、不機嫌であった。その陰鬱な気分はいくらかアルノー夫人へも伝染した。彼女は生活力の調子が狂っており、そして新しい均斉を求めようとする、そんな年齢を通過していた。しばらくの間この夫婦は二人とも、生きる理由をすっかり見失っていた。なぜなら、彼らは彼らが心の中で紡ぐ理想の夢の網をつなぐ支柱を、もはや持たなかったからである。夫のアルノーは妻に助力するどころか、却って妻だけを頼みにしてしがみついた。妻は自分の力が夫を支えるだけ充分には強くないと感じた。すると、もう自分自身を支えている力もぬけていった。この時の彼女を救うことができるのはただ奇跡だけだった。彼女は奇跡を呼び求めた……

朗読3 中田

朗読4 松田

「君を裏切ったとすれば、あのひとは君の味方ではないわけだ！君の敵なのだ。忘れてしまいたまえ。さもなければ殺してしまいたまえ！」

朗読5 松田・中田

「別々に住んで、自分、自分の生活をすべきでしょうか」

「芸術です」

朗読6 松田

「それは一人の可愛い子どもです」

「自然な生き方？」

「——それは、強くあることによってです」

朗読7 松田・中田

朗読8 松田